

平成 27 年度 第 2 回三原市市民協働推進委員会 概要

◇日時：平成 27 年 5 月 19 日（火）午後 10 時～午前 11 時 45 分

◇場所：本庁議会棟 3 階 委員会室

◇出席委員：8 名（欠席 6 名）

◇議事内容

◇主な意見（○委員，●事務局）

1 開会

2 協議

（1）住民自治組織の目指す姿について（資料）

（2）第 2 期市民協働のまちづくり推進計画（素案）について

事務局より説明。

- ：推進計画案に，前回の委員会資料（別紙 2－1）も加えたほうが分かりやすかったのではないかな。
- ：課題に住民自治組織では会員の高齢化，加入率の低下が喫緊の課題とあるが，例えば町内会加入率が 90%以上だが高齢化していて力が発揮できないという場合には，実態が分からなくなってしまうのではないかな。
- ：チェック項目はもう少し精査する必要があると思う。
- ：元気な高齢者もいらっしゃるのだから，一概に高齢化しているからどうとは言えないと思うが，一般的には限界集落と言われているものは高齢化率がどれくらいであるというものを出していると思うので，それが一つの指標にはなるかなと思う。
- ：前回委員会の資料に出ていた基礎自治会の表に世帯数が入っていたが，この他に，加入者の年齢といった基礎データは事務局として持っているのか。
- ：そこまでのデータは持っていない。
- ：このチェック項目の②自治会活動の「役員が固定化し，負担が集中している」の背景は，よく動いてくださる方がおられる，もう一つは他にお願ひする人がいないという複数の要因があると思う。草刈りやごみ拾いの参加率が 80%以上でも，実際には座って休んでいる方が多いという実態がけっこうあると思う。そこをどう拾っていくかを考えたときに，チェックリストに当てはまらないものがあり，答えにくいのではないかな。
- ：このチェックシートは，自治会・町内会がしっかりした上で，ここができるかというものになっている。今，町内会・自治会等では，どうやって人集めをするか考えている。例えば，スポーツで人集めをし，それから次の段階として，草刈りや道路の整備となるので，人集めの順序が違う気がする。草刈りやごみ拾いができるような状態に持ってくるまでに何かしなければいけない。参加してもらえるような状態ができているかということが問いかけで出てこないといけないのではないかな。
- ：そこには楽しいことであるとか，町内会に参加すると何かいいことがあるといったことがほしい。また，まちが汚くなってなんとかしたいといった，ニーズや必然性があって初めて人が動いてくださるのではないかなと思う。課題に対してどうするかというチェックをしていくスタイルがいるのではないかな。

- ：これまで、アンケート、ヒアリングをベースにしているの、地元がこういった悩みを抱えていてどうしたいというところからスタートしなければいけない。質問項目がまだ精査されていない。課題をまず自分たちで理解しながら、自治会がグルーピングできて、属性が分かって、どのあたりからスタートしていけばいいと、その対策、処方箋は何かという繋がりがあるといいと思う。
- ：20ページの図のマークがいろいろな大きさになっていると混乱するのではないか。自分がどこにいるかのスタート地点、「知る」「はじめる」「深める」のどこになるかが分かればいいので、こんなにたくさんマークがなくてもいいのではないか。22, 23ページの元気度チェックとチェックシートはどういった関係になっているのか。
- ：チェックシートは、計画書の概要版やあるいは各町内会に配付し、自分達の町内会はどんな位置にいるのか診断してもらうものと思っている。22, 23ページは計画書に載せて支援策に結び付けていくためのチェックシートであると理解していただければと思う。
- ：チェックシートは自治会に配付しチェックしやすいようにする資料と考えればいいと思う。
- ：計画書の22, 23ページにあるように、実際にどうしたらいいか何ページを見てくださいというもの。チェックシートに含まれていくということか。
- ：そうである。
- ：「知る」は28, 29ページで詳しくなっているが、情報発信の観点で書かれていると思う。情報発信を言っているが、双方向の情報のやりとり、対話でないと意味がないのではないか。当然、伝えることは大事で、伝えた相手の反応をどうやって受け取り、それを返していくか、それが協働の推進の指針である。「知る」の意味をここで議論しないと、まったく違ったものになると思う。
- ：市民活動団体の課題から引き出されたものではないのか。28ページの情報発信エキスパート養成講座の開催というのは、「知る」という第1段階に位置づけられている対策として、運営側が住民側に発信する一方通行でいいことだと思うが、これはそういう意図なのか。
- ：住民組織の元気度チェックから、28ページに飛んで、対象は住民自治組織、市民活動団体と書いてあるので、そのところはどうかと思う。
- ：もう一度、以前の委員会で議論していただいた過去のアンケートやヒアリングをベースにした施策の表を一つずつ当てはまっているか確認していく必要がある。
- ：話を少し戻すが、「元気度」という表現について、私は少し違和感がある。「活性度」や「活発度」と言うほうがいいのではないか。「元気度」というと元気がないのは駄目ということになるが、もう少し表現を変えて、参加率を上げるとか、活動を楽しいものにするとか、人との接点を喜びに感じることを高めるとか、そういったことを総称した表現を探したほうがよいのではないか。
- ：20ページのマークは、試みとしてはおもしろいが、見えにくくなっているの、もう少しシンプルにしたほうがいいと思う。また、20ページの下縦横の矢印が重なっている表が、何の説明もないため浮いてしまっているの、説明が必要だと思う。
- ：22, 23ページのチェックシートは、自分達の自治会のことをまるごとチェックするには足りないの、後半のページに導くためのものに過ぎない。別紙のチェックシートは、もう少しはっきりと自治会のポジションが見えるようなものにしたほうがいいと思うが、この冊子に入れ込むのかそれとも別紙として使うものとして、役割の違いを設けたほうがいいのではないか。

- ：そもそもこれは自治会が使うチェックリストで、これをベースに22ページは、各自治会がこの計画でどの辺にいるのかを見つけ出すためのチェックリストということか。
- ：紙のチェックリストは自治会の役員が、話ができるようなものにしたらいいのではないか。冊子に一度チェックしてみてくださいとメッセージを付けると、やってくれるのではないか。このチェックシートは自分達がおおまかにどのポジションか知るためである。もう少し本格的にチェックしようと思うと、自分達の事業内容や組織、財源といったことを一つずつチェックできるような項目を作って、できていれば5つ星、あまりできていなければ1つ星といった形で自己診断をする。そこで、星の数を増やすにはどうしたらよいかという年次計画を超えた5年先ぐらいの計画作りをやってみるといったワークシートを、この計画を策定した後に作っていったらいいのではないか。
- ：この計画ができた後、具体的にどうするかというアクションプランといったものが必要になると思う。一方で自己判断をするチェックも必要だが、市でいろいろな基礎データを持っており、自己判断のチェックシートと重ね合わせながら支援をしていくことができないかと思っている。そういう流れで、こう進んでいく、これをどう使うのかということ計画に入れる必要があるのではないか。
- ：自治会活動をどうするのか、学ぶ、育つということがあまり見えてこない。構成するメンバーがともに学んで育っていくという場や機会を持っているというのがあってもいいのではないか。23ページの「知る」の中で、場づくりに「学ぶ」を入れてはどうか。私たちが人生を豊かにするという視点を入れておかないと、感動も生まれなければ、地域福利もうまくいかないと思う。
- ：自治教育というところからスタートしないといけない。そういったことはアンケートやヒアリングからの課題抽出で出てきていたと思うので、もう一度漏れがないかも含めて精査が必要である。
- ：当初の推進指針に、「ともに学び、ともに育ち、ともに変わる」という言葉が入っていたと思う。それをもう一度振り返りながら、指針の延長線上に作っているという形にしたほうがいいと思う。
- ：「元気度」という表現についてはどう思うか。
- ：もう少し何か工夫があったほうがいいと思う。
- ：問診や処方箋という言葉が出ているが、一人ひとりが町の課題を見ながら自分たちで治していくという町医者のようなことがまちづくりには必要ではないかと思い、医者表現を使っている。
- ：「知る」「はじめる」「深める」は、ステップ1、2、3というステップを上げていこうというものなので、元気度を測る必要はないのではないか。今、どのようなステップを踏めばいいのかわかってもらえればいいので、元気がどうかを測定するためにやっているわけではないと思う。
- ：自分達の地域のことをよく分かっていないのではないか。自分達がどの位置にいるのか分かれば、次のステップに上がれるというチェックリストにすればいいのではないか。
- ：処方箋という言葉に少し違和感があるが、「元気度」は「現状チェック」という言葉にしてはどうか。良い、悪いを判断するものではないものにしたほうがいいのではないか。
- ：医学モデルではなく生活モデルでいったほうがいいのではないか。また、元気度という言葉にこだわるのであれば、今課題や問題点をチェックしているが、地域住民の底力をチェックするというほうがいいのではないか。自分達が住んでいる地域のいいところに目をむけないとうまくいかない。
- ：病院に例えると、最終的に予防がある。まちづくりで言うと、人口が減る、高齢化が進むという課題への対応だけだと、5年、10年後、三原市または地域をどうするかという夢がないので、前も

って予防まで視野に入れた計画ができないか。問診票の課題に絆創膏を貼るような治療となっているが、ここに地域の歴史や文化、誇れる自然を知っているかといったことを聞くと、魅力が分かっているのであればそれを活用したことができるのではないか。今は対処療法的なものになっているので、第2期計画としては少し物足りないと感じる。

- ：23ページに自治会・町内会意見交換会の開催とあって、31ページに具体的に書いてあり、いいところを見つけるというやり方だが、地元の人はいいいところに気づいていないことが多い。歴史、伝統、文化の中でみんなが一つになれるものがストレングスになる。そんなものを元気度、現状チェックで「心を一にするようなイベントがあるか」を聞いてみてもおもしろいのではないか。
- ：課題や悩みが分かることも必要であるが、次に具体的にどうしたらいいかという段階で自分達の地域や自治会が持っているいいところ、財産を含めて分かってもらわないといけない。第2期計画から次のアクションプランに繋がるようなステップを明らかにして、次のステップではこういったことをチェックしながら前に進めるということを第2期計画で示さなければいけない。
- ：問診票の質問項目を「自治会の加入率は50%を超えている」というふうに全部反対に変えてプラスの表現にするといいのではないか。それから、診断結果を逆転して、チェックが付くほど良いようにするだけで、内容は一緒だが印象が違ってくる。また、高齢化している自治会のことも、しんしゃくできるような項目や、協働で学べるような項目を加えることで、この議論が反映されるのではないか。
- ：住民ニーズを基に計画策定するのも一つだと思うが、一步半先を読んで進めということも言われる。そうすると、三原市がこういう現状があると認めた上で、一步半先の予防の部分がないと、対処療法的な課題解決だけで終わってしまい、目標が伝わらないし見えてこない。ニーズだけでなく、意識を変えていくということも行政の役割ではないかと思う。
- ：市としてどこへ皆さんを引っ張り上げようとしているのかといった目標、目指す姿を最初の第1章に入れたいといけない。診断から始まる各ステップ、行政のサポートがあって、市として皆さんと一緒にここに向かって行こうという流れが分かるようにどこかにいれていく。
- ：長期総合計画に繋がるものでもあるので、そこの関連性が計画書に見えればと思う。
- ：4ページに、「市民協働のまちづくりとは『住みよいまち』をつくっていくための方法です」と書かれているが「私たちそれぞれが豊かな人生を過ごせるわがまち三原をともにつくっていくために」といった表現があってもいいのではないか。主体的に参画してともにつくっていく、わが町内会・自治会をどうするのかを考えていく、また、暮らしを少しでも良くしようと市民活動団体は活動されており、その力が合わさって、まちづくりという形になる。まちづくりが先にあるのではなく、私たち一人ひとりの人生がそこにかかっているのだというニュアンスがあってもいいのではないか。
- ：4ページの2段落目と3段落目の間に一つ文章を入れて、市民の目から見て協働はどういう意味があるのかを付け加えたいのではないか。
- ：担い手の役割の防犯灯の設置や管理、防災・防犯、交通安全の活動は、人集めができてからできることで、第2ステージの段階である。もう一つ、自主防災組織の設立が、中核組織の中に出ているが、今自主防災組織はできるだけ小さい組織で立ち上げるという方向性が出ている。まちづくり協議会で言うと、組織の設立というよりは、ネットワークを組むということが言われているので、そ

ういった文言についても、実情に即したものにしていける必要があると思う。

- ：町内会・自治会も課題があり、課題解決のために計画がつけられているのに、役割は従来のもので、行政からのお知らせの配布が町内会の役割に入っているのは、行政の下請機関のような印象を受ける。情報伝達は必要だと思うが、これから人口が減っていき、いかに町内会・自治会を活性化していくかとなると、もう少し違う表現のほうがいいのではないか。
- ：ここにあげている役割は手段であって、目的をもう少し明確にしないといけないと思う。お互いが豊かな暮らしを地域の人とともに築いていく、豊かな人生を送るためにというのが一番大きな目的になると思う。その手段として、まちづくり協議会や市民活動団体、中核組織があって、それをもう少しプレイクダウンすると、どうしていけばいいのかが出てきている。
- ：もう一つは市民の豊かな暮らしのために何をどう学ぶのかという「学び」が注目されている。地域の人たちと一緒に学ぶという機能が必要ではないか。福祉力という言葉があるが、地域での福祉的な機能、役割がここにあまり入っていない。豊かな暮らしをするというのは福祉そのものであるの、そのことを含めて、もう少し書き方を整理してもいいのではないか。
- ：女性会や子ども会が成り立たないといった状況がある。地域団体と住民組織を合体して、連絡協議会をつくるといった時代になってくるのだと思う。まちを支えるのに自治組織だけではなく、町内にある地域団体を丸め込んでまちを支えていくという方向性になっていくのではないか。
- ：敬老会などいろいろなイベントをするにしても、老人会と女性会と町内会が一緒になって、地域の社会福祉協議会という名称を使っているが、やっている人は同じ人になっている。
- ：ここには商工会議所や青年会議所、同友会などの経済界が入っていない。NPOでも地域活動、社会貢献をされているが、今後は企業とどう連携するか、一歩半先を見たときに必要ではないか。地域も経済を活性化させていくことも欠かせないので、担い手には企業や経済団体も必要ではないか。
- ：アンケートやヒアリングなどで地域団体や自治会が弱ってきていることを把握したが、それ以外は把握していない。市民全体が急速に地域活動や社会との接点に関心がなくなっているのかということ、そうでもないのではないか。女子会や趣味のサークル活動で、人は人間関係、社会関係を豊かに築いている。企業の社会貢献活動については、それも射程に入れていと表明するために、企業について書き加える必要はあると思う。
- ：ともに学び、ともに育ち、という部分是指針にもあるので、そういったことも計画書に入れていきたいと思う。20、21ページは、委員みなさんの意見を盛り込みながら、前回の委員会資料にあるような説明を入れて、もう少し深く記載したほうが良いと考えている。具体的な支援策についても、整理が足りなかったもので、精査していく。また、施策の体系図も抜けているので入れていく。
- ：現場で使うチェックシートを使ってもらい、自分達の立ち位置を分かってもらって、それに対する支援をするのだけれど、その支援を具体的にしようとする、もう少し違うチェックもさらに必要になってくる。それが、一つひとつの自治会がアクションを起こすためのプランになってくるということ、これを計画に入れていきたい。最終的には三原をみんなが一緒になってどうつくっていくかということが見えるように流れを作らないといけない。

### 3 その他

事務局より次回の委員会の開催について説明。

閉会